別紙様式２

令和６年２月 29 日

教育長　様

校番051　安古市高等学校長
（全日制課程）

# 「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校 令和５年度　実施報告書

## １　学校の教育目標等

⑴ 教育目標

校訓「仰高」（心豊かな人生の創造をめざし高遠の理想を仰ぐ）のもと、知（学力）、徳（人間性）、体（健康・体力）をバランスよく育み、社会に貢献できる人材を育成する。

⑵ 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

本校の育てたい生徒像（グラデュエーション・ポリシー）は、

高い「志」を持って、

(1)　多様な価値や意見を尊重する中で、自分の考えを創り適切に行動する人（自律）

(2)　果敢に挑戦し、粘り強く努力を続ける人（挑戦）

(3)　コミュニケーションを取りながら、他者と協働して社会に貢献する人（貢献）

※「志」とは、「将来の目標」の他、「思いやりの心」、「あきらめない気持ち」、「心を集中すること」、「感謝する気持ち」等を意味する。

※⑶の文中にある「社会」には、仲間・クラス・学校・家族・地域など様々な意味を含む。

その実現のために育成すべき（身に付けたい）資質・能力は、

(1)　≪自律≫については

① 情報リテラシー＝様々な情報や他者の意見の内容を正しく理解し、それらを踏まえて自分の考えや価値観を見直し再構築する力

②　自己管理（セルフマネジメント）能力＝場面ごとに適切な発言や行動が何か考えながら、自分の学びや生活を調整し将来を設計する力

(2)　≪挑戦≫については

①　チャレンジ精神＝自ら設定した目標に果敢に挑戦しようとする態度

②　粘り強さ＝目標実現のための計画を立て、その達成に向けて粘り強く努力を続ける力

(3)　≪貢献≫については

①　コミュニケーション能力＝他者の話や意見を傾聴したり他者に質問したりする力（聞く力 ）、考えや話し合ったことを他者に伝える力（伝える力）

②　課題発見・解決能力＝課題を見いだし、その解決のために協働して考察し、解決策を提案・実行する力

(3) 学科等の特色

本校は普通科高校として、すべての教科で①知識及び技能の習得　②思考力、判断力、表現力等の育成　③学びに向かう力・人間性等の涵養に努めるとともに、「総合的な探究の時間」を中核とした教科横断的な学びを促進する教育活動を展開している。また、ユネスコスクールとして異文化間協働活動に力を入れており、オーストラリアの姉妹校連携をはじめ、「多様性を尊重しながら自分の力で考え行動できる人材」、「高い志をもって他者や社会に貢献できる人材」の育成に努めている。

## ２　研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

① キャリア教育の視点を取り入れた「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発と中身づくり

② 「総合的な探究の時間」と各教科の授業の相互で作用しあう教科横断的な学びの構想と実践

③ ＳＴＥＡＭ教育の理念や目的の全体共有・理解と、実践事例の開発

④ ＩＣＴの有効活用におけるデジタル・シティズンシップの視点からの取組

⑤ 新学習指導要領の実施に伴う各教科・科目の単元開発の研究

(2) １年後の目指す学校の姿

① 「総合的な探究の時間」では、生徒が自ら発見した課題に基づいて主体的に探究テーマを設定し、書籍やインターネットだけでなく、地域社会におけるフィールドワークやインタビュー、大学や企業、同窓会からの指導や支援など、関係機関と連携の上、自分事として探究活動を進め、仲間と協働しながら解決策や最善解を具体的に提案するなど、今以上に深い学び・質の高い探究活動ができている。

② 進路実現に向けて、「総合的な探究の時間」での探究活動を通して自己の進路についても探究を深めることにより、多くの生徒が将来の目標を明確化し、より目的意識を強めて教科学習等に取り組むことができている。

③ 「総合的な探究の時間」で行われる探究活動の内容が教科の授業に還流されていたり、教科の授業で培われた各教科の見方・考え方や授業内容が「総合的な探究の時間」で行われる探究活動に用いられていたりするなど、相互が有機的にリンクしており、カリキュラム・マネジメントが適切に行われている。

④ 教職員は、各教科で課題発見・解決型、探究型の授業を実施するとともに、毎時間の目標と評価を明確化し、ポートフォリオを活用するなどして授業改善に取り組み、生徒の資質・能力が適切に育成されるように努めている。

⑤ 課題発見・解決学習のカリキュラム開発、デジタル・シティズンシップ、ＳＴＥＡＭ教育の取組が総合された「知の冒険」の活動が本校の大きな特色の一つとして認知されることにより、本校で学びたいと思う中学生が増加するなど、学校の魅力化につながっている。

(3) 令和５年度の目標

ア　アウトプット（活動指標）

- 生徒が設定する課題がより自分事になること、生徒が課題の解決に主体的に取り組むようになることを目指すため、外部との連携が強化され、フィールドワークや講演会等多彩な取組が計画・実行できている。
- ＳＴＥＡＭ教育の実践事例を開発している。
- 令和４年度に引き続き、教職員研修の実施、公開研究授業での教科横断型の授業づくりを計画・実行している。
- ３年間を通した課題発見・解決学習のカリキュラムを改善・開発している。
- ３年間の事業の成果と課題を発表する成果発表会を開催している。

イ　アウトカム（成果目標）

- 学校評価生徒アンケート「本校は総合的な探究の時間で行う探究活動に積極的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が 60.0%以上になっている。
- 授業評価アンケート「この授業に主体的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が 60.0%以上、「この授業では、考えたり、考えたことを表現（発表）したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が 45.0%以上、「この授業では自分で問いを立てたり、課題を発見して解決したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が 35.0%以上になっている。

・　学びのみらいＰＡＳＳのＰＲＯＧ－Ｈコンピテンシーにおいて、各項目がすべて平均値を超えている。

(4)　令和５年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア　カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間（仰高ゼミ）」を中核とする。

イ　カリキュラム開発の概要

（マクロレベル）

今年度の課題発見・解決学習推進プロジェクトの取組内容について職員会議で共有し、全教職員でプロジェクトを推進していく意識統一を図った。また、育成を目指す資質・能力が「総合的な探究の時間」のどの単元で育成することができるのかを明確化するとともに、その共通理解を促すために、イメージマップを作成した。さらに、本校が取り入れるＳＴＥＡM教育の定義を研修の場で共有した。

| |
|---|
| ＳＴＥＡM教育とは、色々な教科で学んだことを組み合わせて使いながら、実際の社会にある課題を発見し、解決に生かしていく教育手法。 |

（ミクロレベル）

生徒の資質・能力の向上と主体的・自律的な学習者の育成、そして、地域から期待され、信頼される学校づくりに向けて、令和４年度に引き続き、「総合的な探究の時間」における探究活動を中核に据えたカリキュラム開発を行った。その際、各教科等において、「思考力、判断力、表現力等」をはじめとする学力３要素の向上のために、「主体的･対話的で深い学び」の実現に向けて、探究活動を各教科学習に汎用的に拡張することで、質の高い授業づくりを推進することとした。そして、令和４年度に十分でなかった内容を中心に、次の①～⑤についての取組を実施した。

**①　１学年「総合的な探究の時間」…協働的な探究を進めていくための環境整備**

○　生徒が、他者との関係の中で自己と向き合っていくための「仲間づくり」と、毘沙門台学区社会福祉協議会（ＬＭＯ毘沙門台）との連携等、協働的な探究を進めていくための校内外の「環境整備」の二つを重点的に行った。

○　「地域の課題解決のために私たちにできることは何か」という問いのもとで行う地域探究「毘沙門台クエスト」では、直接的な体験を充実させることで、生徒が自分事で考えられるように留意した。

**②　２学年「総合的な探究の時間」…異校種・異年次で協働的に探究する機会の設定**

○　教科横断的な視点を取り入れ、クラスを超えた文理融合のグループによる探究活動を行った。

○　広島市立大学情報科学部・国際学部の学生・院生による生徒への指導・助言交流会を定期的に行った。

○　３年生による探究活動に関わる指導・助言交流会を行った。

○　ＳＴＥＡMの視点を取り入れ、探究内容と各教科で学習した内容との結び付きを考える機会を増やした。

**③　３学年「総合的な探究の時間」…キャリア教育の視点の重視**

生徒が、これまでの探究で学んだことを整理し、これからの自分の生き方とつなげた「未来の学び計画書」をもとに、１学期三者懇談会で、担任・保護者に対してプレゼンを行うようにした。

**④　ＩＣＴの有効活用におけるデジタル・シティズンシップの視点の重視**

生徒が、インターネットで閲覧可能な論文等の先行研究を調べる際、論理的思考、批判的思考を働かせ、デジタル・シティズンシップの視点を持って情報を収集、整理するように留意した。

**⑤　ＳＴＥＡM教育の実践事例の開発**

公開研究授業において、ＳＴＥＡMの視点を取り入れたテーマによる教科横断型の授業に挑戦した。今年度は、芸術科（美術）と情報科、外国語科（英語）と保健体育科（体育）がコラボして公開研究授業を行った。また、ＳＴＥＡM教育の先進校である大分県立大分雄城台高等学校、福岡県立春日高等学校、福岡県立香住丘高等学校を視察した。

ウ　校内体制

令和４年度に引き続き、カリキュラム開発に全教員が参画し、組織的・計画的に進めた。教育研究部を中心に議論し、その結果や研究の方向性を逐次校務運営会議や教科主任会議で報告し、各分掌会や学年会、教科会にお

いて、共有と意見の吸い上げを行った。特に、教科横断的な視点に立って、各教科でどのような内容をどのように取り組んでいくのか、また、その結果に係る成果と課題について、各教科会で十分に協議し、教科主任会議で共有し、カリキュラム開発を進めた。また、実施に当たっては、これまでの大学や同窓会との連携を継続するとともに、産学連携や新たな連携の可能性を含め、生徒の深い学びにつながる連携の在り方を工夫・改善した。

(5) 学習評価

「総合的な探究の時間」では、各単元において到達目標を提示し、生徒の学習状況を到達目標に照らして見取り、次の活動に向けて改善すべき点を生徒に提示していくことで、内容面だけでなく意欲の面でも形成的評価に資するようにした。また、適宜発表活動を取り入れて他者からの評価を得たり、生徒にとって分かりやすい表現でアンケート方式による自己評価（４段階）を行ったりした。そして、次の活動での留意点を提示するとともに、到達目標や指導の適切さを評価することでＰＤＣＡサイクルを回すこととした。さらには、それらの評価を統合的に捉えることで、年度末の総括的評価につなげた。このような指導と評価の一体化を「総合的な探究の時間」だけにとどめず教科学習にも適用させることで、生徒自身が主体的・自律的に学習に取り組んでいくことができるようにした。

民間テストとして今年度は河合塾の「学びみらいＰＡＳＳ」を受験させた。受験結果を生徒に返却する前に、「学びみらいＰＡＳＳ」で測った「今後の社会を生き抜く力（ジェネリックスキル）」の必要性を解説する会を設けた。

(6) カリキュラム評価

(マクロレベル)

年２回の授業改善アンケート及び学校評価アンケートをもとに評価した。

（ミクロレベル）

１年生の「自己探究」・「毘沙門台クエスト（地域探究）」、２年生の「知の冒険（グループ探究）」、３年生の「未来の学び計画書」の作成を通して、カリキュラムが生徒の資質・能力の育成にとって有効であったか否かを、生徒の自己評価を含めて評価した。その際、指導・助言者や学校運営協議会からも、校内における評価の妥当性やカリキュラム改善に向けての意見を聴取し、改善に反映させた。

## ３　令和５年度の成果及び課題

(1) 成果

- ○ 育てたい生徒像と育成すべき資質・能力について、生徒、教員間で共有できた。その結果、学校評価生徒アンケート「本校の教育目標（自律・挑戦・貢献）を知っている」という項目で、肯定的回答の割合が増加した（+4.7%）。
- ○ 「総合的な探究の時間」のカリキュラム開発・改善を、進路指導部・学年会と連携して行えた。また、学年会で出た意見などを反映させ、年度途中でも計画を改善して実施した。
- ○ 様々な機会で探究活動の成果を発表する生徒が増加した。今年度エントリーした生徒数は39人だった（延べ人数）。このことから、新たな気付きを得て、探究の質が高まり、自分の進路と結び付けて考える生徒が増えたと思われる。
- ○ 「学校づくり」と「まちづくり」が連動できた。具体的には、広島市安佐南区毘沙門台社会福祉協議会と近隣の小中学校と提携を結び、定期的に連携をすることができるようになった。それによって、生徒の成果発表会に地域の方が参加され、フィードバックをいただいたり、生徒が地域の行事にボランティアスタッフとして参加したりするなどの交流が増えた。
- ○ 学校評価生徒アンケート「本校は総合的な探究の時間で行う探究活動に積極的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が目標の60.0%には達しなかったが、54.8%と微増した（前年比+1.7）。学年ごとに見ると、２年生の最も肯定的回答の割合が58.1%と増加した（前年比+21.9%）。これは個人探究からグループ探究にしたことで、互いに支え合い、協働して探究できた成果であると考えられる。
- ○ 第２回授業評価アンケート「この授業に主体的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が63.9%（目標値+3.9%）、「この授業では、考えたり、考えたことを表現（発表）したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が50.7%（目標値+5.7%）、「この授業では自分で問いを立てたり、課題を発見して解決したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が36.6%（目標値+1.6%）になり、目標を達成できた。これは教科主任会議を中心に、定期考査で出題した思考力を問う問題や日頃の授業で行ったパフォーマンス課題を共有し、学校全体として授業改善を行ってきた成果であると考えられる。

○　「学びみらいＰＡＳＳ」のＰＲＯＧ－Ｈコンピテンシーにおいて、１・２学年とも各項目がすべて平均値を超えていた。リテラシーにおいては、１・２学年とも情報分析力[1]が高かった（１学年 3.20（全国比＋0.6)、２学年 3.07（全国比＋0.34)。これは本校が身に付けさせたい６つの資質・能力のうち「情報リテラシー」に関係している。また、コンピテンシーにおいては、１学年は対自己基礎力の行動持続力[2]が高く（3.00（全国比＋0.15)、２学年は対人基礎力の親和力[3]が高かった（3.35（全国比＋0.21))。行動継続力は、本校が身に付けさせたい６つの資質・能力のうち「粘り強さ」に関係しており、親和力は「コミュニケーション能力」に関係している。以上の「学びみらいＰＡＳＳ」の結果から、身に付けさせたい資質・能力が比較的身に付いてきていることが窺える。

○　3Dプリンターや移動式の机、ホワイトボードを設置した「探究ラボ」教室を作った。

(2)　課題

○　２学年の探究において、先行研究を調べる時間を設けてはいたが、それをもとに探究テーマを深堀したり、自身の探究に繋げたりすることができていたグループが少なかった。

○　学校評価生徒アンケート「本校は総合的な探究の時間で行う探究活動に積極的に取り組んでいる」という項目で、１年生の最も肯定的回答の割合が 50.8%と減少した（前年比－19.9%)。

○　「総合的な探究の時間」の単元ごとのルーブリックの作成が間に合っておらず、生徒の育ちを見取ることが十分でなかった。ルーブリックの作成、改善、共有が急務である。

## ４　令和６年度の研究目標及び取組内容

(1)　令和６年度の研究目標

ア　アウトプット（活動指標）

- 令和５年度の取組について、ＰＤＣＡサイクルに則って、できなかったことを明確にし、活動指標とする。
- ＳＴＥＡM教育の実践事例を開発する。
- 令和４年度に引き続き、教職員研修の実施、公開研究授業での教科横断型の授業づくりを計画・実行する。
- ３年間を通した課題発見・解決学習のカリキュラムをまとめ、その成果を冊子とする。
- ３年間の事業の成果と課題を発表する成果発表会を開催する。

イ　アウトカム（成果目標）

- 学校評価生徒アンケート「本校は総合的な探究の時間で行う探究活動に積極的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が 60.0%以上になっている。
- 授業評価アンケート「この授業に主体的に取り組んでいる」という項目で、最も肯定的回答の割合が 60.0%以上、「この授業では、考えたり、考えたことを表現（発表）したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が 45.0%以上、「この授業では自分で問いを立てたり、課題を発見して解決したりする場面がある」という項目で、最も肯定的回答の割合が 35.0%以上になっている。

(2)　令和６年度のカリキュラム改善の内容及び校内体制

ア　カリキュラム改善の概要

１学年は今年度の毘沙門台クエスト・パネルディスカッションで提案した内容をさらに深め、少なくとも１つの提案を地域と実行していく。そのために、年度当初の遠足から毘沙門台地区の散策を行い、学校周辺の様子を観察させる。生徒が毘沙門台クエストをさらに自分事として捉えて取り組めるよう工夫していく。また、提携を結んだ小中学校や２学年の生徒などとの交流の場を設け、より探究の質を高めたい。３学期には次年度の「知の冒険」に向けて探究テーマについて考えていく機会を設ける。

２学年はクラス内でのグループをつくり、協働的な探究活動を行っていく。グループでディスカッションを行い、多様なものの見方・考え方を働かせ探究を深めさせていきたい。ただし、ポスター発表については個人で行わせ、個人のコミュニケーション能力（聞く力、伝える力）を身に付けさせ、生徒一人一人が責任を持った探究活動にしていく。

３学年は、未来の学び計画書の作成した後、高校生活を通して努力したことなどを生徒一人一人が決めた表現で自己ＰＲ書を作成する。同窓会に講師を依頼し、希望者対象に自己ＰＲ発表会を行う。

[1] 思い込みや憶測ではなく、客観的に情報を分析し、そこに隠された構造を正確にとらえて、本質を見極める力。
[2] 物事に対して、最後まで粘り強く責任を持って取り組む力。
[3] 多様な考えを受け入れ、相手の立場に立って考えることで、信頼を引き出して人間関係を構築していく力。

学年全体を通して、問題の解決策を考え抜き、表現する場面を取り入れ、論理的に組み立てて表現する批判的思考力と問題をみいだし解決策を生み出す創造的思考力を身に付けさせたい。その際、「アイデアをカタチに」を支援する「探究ラボ」教室を積極的に活用させたい。

イ　校内体制

教育研究部を中心に研究を進めていく。キャリア教育と深く関わるカリキュラムへの改編を行っていくため、より一層進路指導部や特別活動推進部とも連携を密に行う。また、学校全体として取り組んでいくため、校内研修や学年会議等で共有を図っていく。